



Title	神的能力への予覚 : 見ることの根源条件
Author(s)	高橋, 吉文
Citation	CATS 叢書, 11, 219-237
Issue Date	2017-03-07
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/66678">https://hdl.handle.net/2115/66678</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	CATS11_30.pdf



# 神的力量Xへの予覚 — 見ることの根源条件

高橋 吉文

北海道大学 名誉教授

## 1. 切断

1. 美術館等で展示されている何かを見るにせよ、また旅する観光で何かを見て体験するにせよ、その際人はそもそも何を見、何を体験しようとしているのだろうか。

\*\*\*            \*\*\*            \*\*\*

2. 見る行為（見ること）は、①見る人と、②見られるモノ・コトの2項があって成立する。
3. ②見られるモノ・コトは、それを③見せる人が、①見る人に呈示するモノ・コトである。
4. ①②③の3項があって、見る・体験する展示・観光が成立する。
5. ②見られる（見せられる）モノ・コトは、その内容が日常的なモノ・コトであっても、日常（常態）から切り離された（separated）モノ・コトである。
6. 日常の文脈から切り離されていないモノ・コトは、自明のルーティン性に埋もれ、人の眼には見えない、ないしは特別のものとしては見えない。
7. 展示され・観光されて②「見られるモノ・コト」、すなわち①「見る人」によって②「見られるモノ・コト」が、日常という文脈から"切断"されたモノ・コトであれば、展示的に・観光的に「見る」という現象の発生において、最も基本的条件となるものは"切断" separation ということになる。
8. "切断"は、切断線（ライン）を境にして、内なる自己と外なる他者とを分節する行為ならびに現象である。
9. 内なる自己は新たな日常へ、外なる他者は新たな他者たちの非日常へと分岐される。
10. その分節（切断）の異常性によって、「②見せられるモノ・コト」は、魅力的でエキゾチックな新奇性を獲得し、「①見る人」の眼に異化されてあらわれる。
11. 異化の瞬間、"切断"ラインの外なる彼方は、ラインの内なる者には見えないがゆえに異界性を帯び、エキゾチックな香気をラインのこちら側すなわち内なる自己の方へと濃厚に吹き寄せるのである。
12. "切断"時、内なる自己側に組み入れられた新たな日常は、外なる他者たちという新たな非日常を予感的に体感させる。

## 2. 現実の絶対主義

13. "切断"separation は、【内／外，自己／他者，日常／非日常，秩序／無秩序，可知／不可知】の分節によって，排除された外部の未知で不可知なる領域を，エキゾチックな異界として予感的に内側に喚起する。
14. ホモサピエンスの認知を行う脳は，脳科学によれば各種差異の認知と判断を基本として，また日常（常態）を裏切る（つまり"切断"する）"サプライズ"の新奇性を不可欠とし，またそれを渴望するものである。
15. 新奇性に渴望する欲望を好奇心という。
16. 脳と精神に好奇心が内挿されたホモサピエンスとは，好奇心と"サプライズ"に飢え，それを血のように啜らなければ絶滅するであろう吸血鬼（ヴァンパイア）的存在である。
17. 各種生命体およびその一種であるホモサピエンスを，生態圏内でのサバイバルとその凱歌となる文明の創出へと駆動させていった最重要因子は，新しい"切断"により喚起されるそうした新奇性を飢渴する好奇心である。  
cf. ブルーメンベルク『近代の正統性Ⅱ 理論的好奇心に対する審判のプロセス』（忽那敬三訳，叢書・ユニベルシタス，法政大学出版局，2001，第三部第Ⅵ章）
18. その人類の歴史において遅れて登場したとはいえ，対象を認知・認識し社会共同体をつくるにおいて比類ない力を発揮した言語もまた，分節と差異化すなわち差別と切断とによって発生し機能しているものである。
19. 切断（分節）は，現生人類が創りだしたあらゆる共同体や社会システムのあらゆる時点と場に随時かつ幾重にも出現可能である。
20. 日常／非日常の切断は，どこであれいつであれどのようにであれ，多様かつ恣意的に可能である。
21. しかしながら，ホモサピエンスという生命体の身体，およびそれら身体存在群が創りだす共同体や社会システムにその発生と持続とを可能ならしめる生態的な限界線を，人は越えられない。
22. いかようにも可能に見える膨大な切断群も，つまるところはホモサピエンスを身体的に存立可能ならしめている【大自然／文化（文明）】という根源的な"切断"にもとづき，はじまっていく。
23. 種々の危険に満ちる大自然の中で，脆弱な身体能力しか有しないホモサピエンスの身体が直面する死との境界線こそが，ホモサピエンスという生命体にとっての，そしてまた「見ること」にとっての根源的な"切断"ラインをなす。
24. 【大自然／ヒトの身体・精神】とを分節するこの根源的な"切断"線を，第1次的"切断"

ないしは原"切断" Ur-Separation と呼ぶこととする。

25. 上の対立項【大自然／ヒトの身体】に精神を加えて，【大自然／ヒトの身体・精神】としたのは，精神がデジタル的（バーチャル的）に走らせた分節・境界設定が，他の生命体とは異質なレベルでの一大飛躍を現生人類に可能ならしめた，と考えられるからである。

cf. 認知考古学者スティーブン・ミズン『心の先史時代』（松浦俊輔，牧野美佐緒訳。青土社 1998，p.88, 204）

26. 根源的な切断線の彼方に広がる非-人間的領域は，一方では食糧や環境を恵んで生命体のホモサピエンスを救済すると同時に，それ以上にヒトを破滅させる暴力と恐怖をふんだんにもたらす大自然でもある。
27. ホモサピエンスにとり大自然は，いつであれほとんど圧倒的な暴力と恐怖をもたらすものである。
28. 20世紀ドイツの思想史家ハンス・ブルーメンベルク（1920-1996）は，そのように圧倒的な暴力と破局の必然性として君臨する大自然を，「現実の絶対主義」Der Absolutismus der Wirklichkeit と呼んだ。破滅（死）こそが，まずもって"絶対的"に，すなわち問答無用の必然として睥睨（へいげい）していたからである。

cf. 『神話の変奏』（青木隆嘉訳，叢書・ユニベルシタス，法政大学出版局，2011）

### 3. 絶対的隠喩

29. その途轍もない恐怖の渦の中に投げこまれていた現生人類は，そこにおいて生きのびるため藁をもつかむ思いから，黒々とした大自然とか弱い自己の精神との間に，極めて恣意的にだが，決定的な "切断" 線を走らせる。
30. 大自然という絶対的な恐怖から脆弱な自己を仮そめに護る"切断"線が，「現実の絶対主義」にやや対抗して動員された「絶対的隠喩」Absolute Metapher である（ブルーメンベルク）。

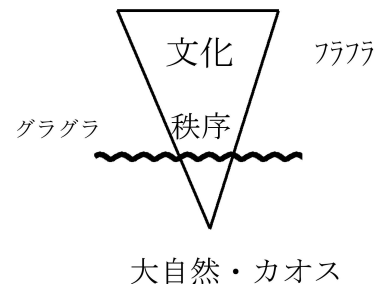
cf. 『隠喩学のためのパラダイム』suhrkamp taschenbuch wissenschaft, 1999

31. 大自然の暴力の中に投げこまれていた人類が，自己防御とサバイバルのために発動させた「絶対的隠喩」は，蚕の繭のように自己防御の強い願望からのみ紡ぎだされた虚構（フィクション）の糸であり，ホモサピエンスの心は，胎児のようにその繭の中にくるまり仮そめの安寧を得る。
32. だが，その繭が自己の外輪部につくり出したバリア（防御壁）は，自身の防御願望から根拠なく，恣意的に紡ぎだされた虚構の夢想，すなわち美的な隠喩（メタファー）であり，自己の精神と身体の存立を合理的に根拠づけうるものでは全くない。
33. 「絶対的隠喩」とは，現生人類が自身の存在根拠を根拠なく，それゆえ"絶対的に"根拠づけ保証する根拠のことである。
34. それは，是非ともなくてはならないという願望だけを根拠とする架空の存在根拠であ

るものである。

35. 「絶対的隠喩」は、存在しない存在根拠という答えを与えてくれる答えなき問いであり、なぜ自分たちは存在するのかという最要諦の問いにして、同時にその問いへの答えでもあり、またそれへの不動の根拠でもありうるものである。
36. ホモサピエンスとしての現生人類が、"隠喩"なる高度なものに認知的に開眼したと推定される後期旧石器時代に、この根拠なき根拠（「絶対的隠喩」）に本能的に想到し、それに強固に支えられ庇護されることで、人間の文明は社会構成主義的に構築されていく。

37. 私たち人類の多様な文化は、いずれもこの根拠なき絶対的根拠である「絶対的隠喩」という、ありてなき特異点を秘密の礎石として、大自然という恐怖の荒海の上*に*いわば倒立している逆三角形状のものである。



38. とはいえ、「絶対的隠喩」という無条件に妄想された虚構の繭によるバリア内にくるまって味わう甘き安寧は、自己防御の願望が捏造した仮そめの夢への引きこもりとでもいうべきものである。
39. 生態圏の中の生命体である限り、願望が紡ぐ人工的な夢想繭（「絶対的隠喩」）の裡に閉じこもり、繭の外の襲いかかる世界（外）から眼をそらして繭の中に引きこもってみたところで、リスクあふれる大自然をサバイバルしていくことはできない。
40. 人がどのように引きこもろうとも、大自然の襲来という「現実の絶対主義」（破局的現実の不可避性）の圧倒的優位に変わりはない。
41. 人間の意向や願望など全く意に介さない非-人間的な大自然の圧倒的暴力によって、ホモサピエンスは、沉んやその脅威に無頓着なまま自己妄想内に引きこもる生命体は、外界に瞬時に蹂躪され滅びるは必定である。
42. それゆえ、「現実の絶対主義」（破滅一元の必然性）の中でサバイバルすべきホモサピエンスは、「絶対的隠喩」（幻想の紡ぐバリア）が湧出させた亜空間内に引きこもる一方で、【大自然／人間の身体・精神】という第一次的"切断"線の向こう側に排除された外の世界、すなわち大自然をも随時覗き見やる必要がある。

#### 4. 秘密のあっこちゃん

43. とはいえ、人にとっての可知的世界は、「絶対的隠喩」の繭バリアが内へとくるみこんだ領域だけであり、繭のバリア（「絶対的隠喩」）という"切断"線を越えた彼方は、人の可知、関与しうる領域ではない。
44. 人にとって外なる世界は、不可知で不可測なるもの、さらにいえば"不在するもの"としてのみ理解されうるものである。
45. その不可知なる領域は、18世紀末のカントにおいては「物自体」Ding an sich として、20世紀初頭の初期ヴァイトゲンシュタインでは、言語的認識の彼方として表現されていた（「語りえないことについては人は沈黙せねばならない」『論理哲学論考』1921）。
46. 彼方の不可知に絶望してその境界に立ちつくす初期ヴァイトゲンシュタインに対して、カントは、『純粋理性批判』（1781, 1787）において、表では感性、知性、理性の複雑にからみあう認知・認識メカニズムを鋭く解析し、人の認識を感性内に限定し、感性的地上から天空の観念的な形而上世界（イデア等）へ繋げていこうと暴走したが、理性には、批判 Kritik によって厳しいブレーキがかけられる。
47. カントが、感性（五感）によっては認識不可能な物自体 Ding an sich を、感性が知性や理性と協働して認識しうる可知的現象と明確に対置するのはよいとしても、リアルに襲いかかることは明々白々な「現実の絶対主義」（破局一元の大自然・宇宙）の脅威を、不可知云々以前にそもそもあるかどうかからしてひどく怪しげな親-人間的な神や理想的なイデア IDEA といった、人間に都合の良い世界肯定原理と同列とし、不可知という同一の次元内に並在させるというのはほとんど詐欺に等しいものがある。
48. 同じ不可知とはいえ、神やイデアは人間の願望した妄想の可能性が大であるのに対して、大自然の実相の不可知の方は確実に破滅をもたらしえ、そして事実おびただしい災厄を人間の世界にもたらしてきた極めてリアルで致命的な不可知であり、神やイデアと同一線上で比較しうるものではない。
49. 圧倒的な恐怖の未知と、極力ありそうにもない救いの未知とをあえて同等として一緒に並行させ、人間の五感の外にあると想定される異なるレベルの不可知の事象が同一の「不可知」という抽象概念へとずらされる時、恐怖の不可知が祝福の不可知へと巧妙にすりかえられる瞞着がおきる。
50. 1755年11月1日朝の礼拝時、カトリックの総本山のひとつでありポルトガル大帝国の首都であるリスボンを襲った大地震（M9）は、一瞬にしてポルトガル大帝国を凋落せしめ、数次の巨大津波は、リスボンのみならずアフリカや英国海岸をも襲い、全ヨーロッパの人々を心の底から震撼させた。
51. 神への信仰と自身の理性を誇示していた18世紀の西洋近代文明は、大自然の気まぐれとその凄まじい破壊力の前に茫然自失となり、以後、その重苦しい恐怖相の下、延々と秘かに戦慄し続けることとなる。

52. だが、カントの不可知である物自体の世界では、リスボン大地震（1755）や東日本大震災（2011）といった激烈な破壊をもたらす天変地異も、人には不可知であるということ、サバイバルしたい欲望にはなぜか優しい、神やアイデアといった世界肯定原理の動向と同じカテゴリーに振り分ける抽象化操作によって、リスボン大地震の途轍もない恐怖も、恐怖か否かのひどく曖昧な決定不能なるものへと中性化され、毒抜きされる。
53. 見たくもない恐怖である「現実の絶対主義」はかくして狡猾に曖昧化され、可知的な人間世界（文化）をぐるり取り囲んで護るバリアの外となる彼方の世界（大自然）から、戦慄の破局性が巧みにはずされていった。
54. それだけではない、その曖昧化とともに大自然からは恐怖相が揮発し、そして放恣な理性に対しては厳格に戒めていたはずの神へと即飛翔するための道筋（「ヤコブの梯子」）が、いつの間にか忽然と裏口に発生している不思議も起こる。
55. 手品よろしく捏造された神やアイデアの高みへと昇る抜け道（裏口）となる「ヤコブの梯子」の幻像が、リスボン大地震への恐怖におののき続けてきた人々を、恐怖が君臨する感性的地上領域での絶望（これが、カントも投げこまれていた「疾風怒濤」の呪いの荒海である）から、喜悅満ちるアイデア天界への上行・救済へと導いていく。
- cf. Sturm und Drang 疾風怒濤時代
56. リスボン大地震の恐怖によって窮地に追いつめられていたはずの人間たちの営みに、とりわけ近代科学の探究の手に、憧れのアイデア樂園へとするりもぐりこめる裏口入学仕様の秘密のお墨付きが、目にもとまらぬ速さで手渡されるアクロバットが披瀝されるにいたるのである。
- cf. リスボン大地震に対して最も迅速な考察を立て続けに行ったカントの思考は、その巨大恐怖との対決と超克をその通奏低音としている。
57. その根拠のない心温まる保証の上に立って、西洋近現代科学の明るい展開と、西洋近代文明による容赦のない世界覇権が強烈に推進かつ拡大されていく。
58. その幻影も、それでも、19世紀末から20世紀初めにかけて、ニーチェやマッハ、先のヴァイトゲンシュタインたちによって相対化され、破碎されていく。
59. 20世紀後半のドイツの社会学者ニクラス・ルーマン（1927-1998）の社会システム理論もまた、人間の文明（社会システム）を、不可知のカオス的大自然の荒海（恐怖）の上に、ほぼ可知的にみえる力線の有限な束のみからなり、宙づりにされたままクラゲのようにぶかぶかと根拠なく浮遊するものと考えた。
- cf. 『社会システム理論（上・下）』（佐藤勉監訳、恒星社厚生閣、2007）  
『信頼——社会的な複雑性の縮減メカニズム』（大庭健、正村俊之訳、勁草書房、2007）
60. 不可知な力線群の無限波浪を、可知的な有限の力線の束へと「縮減」し（ルーマン）、その限定操作によって無限の宇宙を把握しえた、あるいは把握しようと人は明るく妄想したのである。

## 5. 恐怖から恐怖へ

61. 【カオス（宇宙・大自然）／システム（文明）】を創出する第1次的"切断"（絶対的隠喩）が発生するや否や、それに引き続いて第2次、第3次、第4次的というように多層的に切断（差異化）が次々と行われて、差異は増殖かつ重層化し、システムは著しく複雑なものとなり、文化・文明は一見その自立性を強めていく。

cf. メアリー・ダグラス『汚穢と禁忌』（塚本利明訳、ちくま学芸文庫、2009）

62. 多層的切断により複雑化した社会システム（文化）は、それ自体も疑似的自然さながらに迷宮化し、【不可知／可知】の原"切断"のこちら側（可知）に生成された人間の世界もまた、それなりに不可知な密林的ダンジョンの様相を呈していく。
63. とはいえ、社会システムは、近現代西洋文明がそうであるように、その分節模様がいかにも多様に入り組みその緊密さを誇ろうとも、無と中空とを自身の存立根拠とするその逆説的な存在様態からいって、その足元には不可知な大自然というほとんど恐怖のみが不気味に渦巻いているものである。
64. それゆえ、自己を存立させている無根拠という不可知・不可視の存在根拠は、人が決して直視してはならないメドゥーサ的恐怖の眼光でありつつも、同時に、可能な限り婉曲的にではあるが、人と社会システムは、メドゥーサの死と凍結のまなざしに測深波を送り、"切断"線の彼方に広がる不可視の世界からやってくる突然の襲撃に備えていなければならない、ひどく矛盾した生態的な生き物でしかない。
65. 根源的な第1次的"切断"は、理性的根拠や倫理的価値に先立つ美的な隠喩（絶対的隠喩）によってなされたものであり、宗教を根拠づける「聖なるもの」（オットー）も、宗教的価値やイデオロギーを先鋭化させた神学やアイデア等の形而上学における超越的な救済原理考も、"切断"ラインの内側において遅ればせに夢想され、自身の情的願望に即して後天的に捏造されたものであって、人間のサバイバル願望以外にいかなる根拠をも持ちえない。
66. 社会システムは、姿なき（不可視の）特異点である「絶対的隠喩」を起点とするが、それをいわば代行するやや可視的な隠喩が、「絶対的隠喩」の美的隠喩性を踏襲しながら、こちらは、しかし、やや可視的ではある一群の「基底隠喩」Grundmetapher（ブルーメンベルク）である。

cf. 米国の認知科学者レイコフのいう隠喩「人生は旅である」（ジョージ・レイコフ、マーク・ジョンソン『肉中の哲学：肉体を有したマインドが西洋の思考に挑戦する』計見一雄訳、哲学書房、2004）も、ブルーメンベルクが絶対的隠喩とする光と影、時間、未踏の地、難破、円環等の無条件の定型的隠喩も、基底隠喩といえる。

cf. 高橋吉文「隠喩論IV：ブルーメンベルクの基底隠喩配列」、高橋吉文編『隠喩とメタ思考』、日本独文学会研究叢書 37、日本独文学会、郁文堂、2005 所収

67. 美的な「基底隠喩」群が築く美的なネットワークを社会システムの奥底の基層として、

その上に、それこそ生きるためなら何でもありの曖昧模糊たる中間の生活感覚の坍塌「生活世界」Lebenswelt が、「基底隠喩」のネットワークから連続的かつ不連続的に生成される。

68. ①美的感性と②合理的思考とが多様にまざりあう①②「生活世界」を無礼講的な中間地帯として、「絶対的隠喩」や「基底隠喩」群の2者の①美的隠喩的思考と、合理的知性が担う支配的社会体制や、その理知的側面を極度に突き詰めた形而上学 Metaphysik からなる2者の②理知的思考 Ideologie とが混淆する。
69. いわゆる社会システムは、後者の3者すなわち 1) 「生活世界」と 2) 理性による法規的秩序や 3) 形而上学の可視的な3者からなり、最初の2者すなわち①「絶対的隠喩」と「基底隠喩」群ネットワークの美的隠喩次元は、後者の法規的秩序と形而上学の捧持と威厳保持の強い必要性から、徹底して隠蔽される。
70. とはいえ、1755年以後、特に19世紀の西洋社会は、リスボン大地震による恐怖の隠蔽と、その超克・密封方式の探求に悪戦苦闘し、結局はリスボン大地震への恐怖トラウマ地獄の炎の上で次々と明るく演じられていった一連の茶番劇が、西洋近代なるものの正体である。
71. リスボン大地震の恐怖を隠蔽して大躍進を享受した西洋近代の傲慢と幻影をふたたび破壊し、西洋近現代に決定的な引導を渡したのが、それと同規模の2011年3月11日の東日本大震災(M9)である。
72. 1755年のリスボン大地震への震撼と恐怖、そして何よりその巨大トラウマの隠蔽と封印開発とをもってはじまった西洋近現代文明は、2011年の東日本大震災をもって最終的に終焉を上げられ、リスボン大地震襲来直後にヨーロッパ全域に重くのしかかっていたあの破局の絶対的支配（「現実の絶対主義」）の魔の手へと、今ふたたび引きずり戻される。
73. 現代ドイツの社会学者ベック(1944-2015)が警告する「危険社会」すなわち恐怖がむきだしとなって睥睨し荒れ狂う陰惨きわまりない【破局の時代】へと、世界はこの時はつきりとシフトさせられたのである。

cf. 『危険社会』（東廉, 伊藤美登里訳, 叢書・ユニベルシタス, 法政大学出版局, 1998）

## 6. 大衆の身体性と神的力X

74. 展示や観光といった「見ること」に特殊的に特化した現象も、実はこのリスボン大地震の衝撃によって表舞台に登場し定着するようになっていったものである。
75. 18世紀末は、大地震に続いて大噴火もまた連続し、大寒冷による飢饉等の天変地異が次々と民衆に襲いかかり、1760年代からの英国発産業革命による流民化とともに、封建的な社会制度の秩序基盤が、それこそ巨大地震さながらに大きく揺るがせられていった時期である。

76. 「ウルリヒ・イム・ホーフは 1750 年代末からフランス革命までを概観し、その「発火点」を 1755 年のリスボン大地震に見ている。この考え方を援用するならば、アレクシス・ド・トクヴィルの考えるアンシャン・レジーム（旧体制）の「断絶線」も、実はこの 1755 年のリスボン大地震に思えてくる。つまりこの大地震が発生したことによりヨーロッパ全体が震撼とし、フランスではヴォルテールやルソーがこの地震をきっかけにして、革命の導火線に火をつけたのである。」（続く）

\* フランスの歴史家・政治家トクヴィルのいう「断絶線」とは、貴族支配体制が凋落に向かう分岐点を指す。

77. 「リスボンの地震は本震だったが、1789 年のフランス革命はその巨大な「余震」であった。確かにリスボン大震災がフランス革命の重要な「発火点」の役割を担っていた。その余震はトクヴィルが生きた 19 世紀に何回もぐらぐらと揺れ続け、やがてフランスの旧体制を粉々にしたのだ。」（続く）

78. 「それだけではない。ウルリヒ・イム・ホーフが言うように、リスボン大地震の余震はやがてヨーロッパ全体の旧体制もことごとく破壊し尽くす。それがいわば『アンシャン・レジームの死の舞踏』なのである。」

（飯島洋一『破局論』青土社、2013、p.87、但し、数字はアラビア数字に変更している。）

cf. スイスの歴史家ウルリヒ・イム・ホーフ(1917-2001)『啓蒙のヨーロッパ』(成瀬治訳、平凡社、1999)

79. 山岳を描く風景画（ピクチャレスク）も、アルプス等の山岳自然をおとずれる観光も、リスボン大地震が惹起した大自然の破壊力への深い戦慄と畏怖をその決定的な動機とする。

80. 大自然が一瞬開示してみせた奈落（地獄）の底への鮮明な通景 Vista が、西洋に伝統的であった強固な視覚（遠近法）を解体し、人々に新たな「見ること」つまり新しい視覚メディアへの異常なまでの執着と模索を喚起する。

81. 大英博物館の一般公開が 1759 年、ルーブル博物館が 1793 年というように、18 世紀の後半、というより末まで美術等のコレクションは一般市民の目にふれるものではなく、公開されたとしても、多くは収集家個人の好奇心に依存した雑然たる趣味的収集で、公的性格を欠落していた。その意味で美術は、集会的に見られるものではなかったのである。

82. ところが、18 世紀末、とりわけ 19 世紀前半になると、美術館等の前身形態による展示における一般公開が忽然と勃興し、ミュージアムが陸続と設立される異常事態が発生する。

83. それと軌を一にするかのように、19 世紀の初頭 10, 20 年代にメディア史上類例のないとクレリーが呼ぶ架橋不可能の深い亀裂が露わとなる。この時期、「見ること」に関する一大変革が西洋において集会的に生じつつあったことを、これらの事実は示している。

cf. ジョナサン・クレリー『観察者の系譜—視覚空間の変容とモダニティ』（遠藤知巳訳、十月社、1997）

マックス・フォン・バーン『ピーダーマイヤー時代』（飯塚信雄他共訳、三修社、1993）第六章

84. 「いかにしてミュージアムという「媒体 (medium)」が、集合的記憶が作用するさいの方法によって、メタファーとなるのか」  
「私的な記憶はすべて、自らの分節化のために「集合的記憶の構造」に依拠している」  
(同第1章 クレイン 序章, pp.12-13, 後者の引用は但し, フランスの社会学者アルブヴァクスからの引用)
85. リスボン大地震は、トクヴィルやイム・ホーフが主張するように、その余震として貴族支配のアンシャン・レジームを葬り去っただけではない、西洋視覚も普遍的原理も、伝統的な民衆という集合的記憶も【知識人／民衆】の区別等も、すべて揺れと津波で一瞬のうちに粉碎しきったのである。
86. そして、十把一絡げにまとめられて攪拌された都市の民衆たちは、新たに集合化して、「盲目の意志」の人間の分身さながらの怪物性をそなえ、自然直伝の身体性に駆り立てられて暴走する群衆として集合的に覚醒しはじめる。  
cf. 今村仁司『群衆—モンスターの誕生』(ちくま新書, 1996)  
ショーペンハウアー『意志と表象としての世界』1816 (西尾幹二編訳, 世界の名著, 中央公論社, 1975)
87. 「見ること」(展示, 観光), ピクチャレスク, 恐怖小説, 集合的群衆の誕生だけではない, 18世紀後半から19世紀初頭にかけて西洋近代を西洋近代たらしめる一連の諸現象が連続的に姿を見せる。
88. 短調交響曲, 疾風怒濤時代, 民衆の讃美, 民謡への刮目, 群衆の叛乱, アメリカ独立戦争, 仏革命, 絶対的時間の崩壊, 歴史意識(時間)の発生, 挿絵入り新聞・雑誌の誕生, 写真の発明, 美学の確立, 交響曲形式, 教養小説形式, 形式主体にアイデアを志向する古典派, 感情中心にアイデアを志向するロマン派等々。
89. これら一連の近代的現象は, いずれもリスボン大地震という深甚な恐怖を同源とする余震たち, いわば同じ穴のむじなたちである。
90. 例えば, そのひとつである美学は, リスボン大地震の前後に出現したものであるが, 普遍的とみなされてきた合理的哲学思考(形而上学)のリスボン大地震による権威失墜と, 感情への深い傾斜に即応して強く着目され, 思索の表舞台における切実な領域に成りあがりえた18世紀後半の新参者である。
91. 美学は, それゆえ恣意的な感覚・感性に基づく美的趣味判断を, 論理的な思考体系のうちにとりこもうと悪戦苦闘し, カントの『判断力批判』(1790)やそれを踏まえたシラーの思索を実質的なはじまりとして哲学の重要なジャンルを形成する。
92. しかし, 美学の実質的な重要性は, むしろ思弁から逸脱する社会生活における感情が関わる諸分野に飛びこんだことで, 文化人類学(民族学)で西洋外の諸民族に対して開発した視線や方法論が西洋国内の諸事象の観察にフィードバックして誕生した民俗学における民衆生活次元の情的諸データの収集とも合流し, さらに19世紀末から20世紀初頭に蔑視されながらも精力的に刊行された, 現代西洋社会そのものをも同じ

く総体として詳細に精査しようとした生活文化史へとなだれ込んでいく。

93. その文化人類学の視点や方法論を模倣して社会学が曖昧模糊たる大衆研究に大きく乗りだしたのと同じ頃、文化人類学と生活文化史の視線を踏襲して 20 世紀初め新しい歴史学を提唱、20 世紀後半から歴史研究に大きな変革をもたらすことになったフランス・アナール派の歴史アプローチにいたり、感性的事実<sup>1</sup>に真摯な姿勢の開祖ともいえる美学の真の潜勢力は、大輪の花を咲かせるにいたる。
94. そして、リスボン大地震の衝撃が力強く後押しした美学の威光は、20 世紀末、アナール派の延長線上に姿を見せた展示や観光の学的考察へもまた分祀される。観光学は、バウムガルテンとカントに足を向けては寝られないのである。
95. さて、各種の夥しい差異化の積み重ねで構築されている社会システムのアポロ的秩序化志向を、身体性の権化ともいうべき大自然のディオニュソスの恣意（「盲目の意志」）は、無惨に蹂躪していく。
96. アポロ的秩序の天敵ともいうべき大自然の徹底した**平準性（万象の水平化，人間的意味や差異の全的破壊**，大震災後海岸線に細長く連なったあの全的瓦礫状態である）すなわち「盲目の意志」の非-人間的な破壊（平準性）に最も近似する人間的存在といえは、高度に身体的な気まぐれさで公平性（＝あの平準性の変種）を強く叫んで暴走する民衆・群衆・大衆たちである。
97. 近代を揺るがし、近代を始動させた**群衆・大衆の勃興**も、つまり展示や観光（集合的「見ること」）に劣らず、リスボン大地震の震撼によって激しく揺さぶり起こされることになった巨大余震のひとつである。
98. 群衆・大衆は、それ自身、身体性の未来に過敏に反応し翻弄されやすい身体的欲動をもつ極めて生態的な集合的生き物として、流動的な性向をもち、社会システム内に囚われていては本来見えないはずの根源的な"切断"線と、その彼方（身体性の本尊）に対して強烈な関心をいだいている。
99. 気まぐれな「盲目の意志」の別名ともいえる流行 Modeなる恐怖の怪物もまた、大衆が集合的に市場に参与することによって初めて近代の典型的現象のひとつとして発生したものである。

cf. ヴァルター・ベンヤミン『パサーージュ論』（今村仁司、三島憲一訳、青土社 1995、岩波現代文庫 2003）

山田登世子『メディア都市パリ』（ちくま学芸文庫、1995）

100. 自己の身体的存立（生々しい生活基盤）への無意識的な不安に駆り立てられて、大衆は、"切断"線の彼方に予感される不気味だが不可測の流動本体（大自然）に向けてやみくもに測深波を送り、その反応に無節操なまでに一喜一憂する。
101. セキュリティをつくりだすバリア（庇護膜）による安寧の享受が揺らぐ時、恐怖のスイッチが入り、ホモサピエンスとしての太古よりの警戒本能が、大衆に、"切断"線の彼方に広がる暗黒潮流の不気味な潮騒に耳をそばだたせるのである。
102. 第 1 次的"切断"の彼方に広がる不可知な力 X の乱数表的な動向を、疑似的にであれ予

覚しようと探る身体内センサーへの、ほとんど無節操なまでの依存性が、平準性（公平性）に取り憑かれた群衆なる「盲目の」怪物の特徴のひとつである。

cf. エリアス・カネッティ『群衆と権力 上 新装版』（岩田行一訳、叢書・ユニベルシタス、2010）

103. だが、"切断"線の彼方から人間社会のシステム内に容赦なく侵入してくる大自然の圧倒的な力は、人間の知を超えた不可知な謎の力Xである。
104. 人類の存続に資する人間特別仕様のシステムという狭隘な疑似生態圏（セキュリティ・バリア内の亜空間つまり文化や社会）の彼方からやってくる、人の力をはるかに凌駕する圧倒的な力という意味で、その謎の力Xは非-人間的で超越的な力Xである。
105. その謎めく超越的な力Xは、人間の知がはるかに及ばないその超越性のゆえに、人間のためにあってほしいとする願望から、カミや神々的な好意的な**神的力X**として畏れられ、人間たちによって崇められてきた。
106. 大衆も、同時代のカントによる物自体のすりかえに呼応して、しかしカントよりははるかに身体的欲動にのみ従い、恐怖の「盲目の意志」を神的力Xへとすりかえたのである。
107. 超越的な神的力Xとは、根源的な"切断"線をはさんで、不可知な大自然の力（外）をライン内の人間側において隠喩的に模倣することで、いわば疑似的に可視化された、本来は不可視の神的力X（内）として**彼方に想定された力**である。
108. **隠喩 Metapher**とは、恐怖に打ちひしがれた人間が自己の心（や精神）の周りに美的にぐるり巡らせた防御用のバリア（セキュリティ・シールド）であり、その意味では、大自然に対峙する反-自然（反-神的力X）的機能を託された人間特別仕様のフィクションである。
109. フィクションであるとはいえ、正対する大自然と全く異質なものを創出することは、人間にとって原理的に無理な話であり、かつまた恐怖の大自然の攻勢をやや逸らし、それをそれとなく馴致しようと謀る隠喩本来の狙いからいっても、大自然の事象と異質なものを呈示することは意味をなさない。
110. 防御バリアとしての隠喩の第1の役割は、危険きわまりない対象（襲いかかる敵）に、微妙に距離をとり、人間にとり安全に見えるものへと巧みにすり変えることでそっと脱臼させ毒抜きしていくことにある。
111. 別言するならば、隠喩とは、自然・宇宙の恐怖をその**位相をややずらしたかたちでコピー（模倣）して**、恐怖なきないしは恐怖の緩和された**疑似自然にすりかえる**大自然ものまね選手権のことである。
112. その意味からいって隠喩は、一方では反自然のためのバリア（防御シールド）であるとともに、他方その大自然に媚びてそれを模倣する服属儀礼を演じることで和解をはかろうとする面従腹背の模倣方略、擬態でもある。
113. すると、隠喩は、一方ではホモサピエンスが開発した、不在を自己（社会）の存立根拠とする瞞着であるとともに、他方では大自然の超越的な力Xを疑似的に模倣して、大

自然をも瞞着しようとする，薄氷でなされる二重の瞞着であることになる。

114. この薄氷の瞞着技芸において，"切断"線の彼方に広がる大自然という恐怖の力Xも，ともあれ人間に優しげな慈愛的相貌をも少しは見せることはありうる神力的力Xへと変貌する。
115. 人間の社会は，その奇跡の二重の瞞着に護られて壮大な都市文明を築きあげ，現代の繁栄を謳歌するにいたる。
116. しかしながら，人々を本来は護るその社会システムは，反自然性をその基本原理とするがゆえに，その構築の進捗につれて自閉したシステムすなわち巨大な牢獄とも化し，「メディアはメッセージ（=秘密裏に皆さんを幽閉しちゃってますよ）」（マクルーハン）の原理そのままに，各時代における最強最新メディアを駆使して人々をその檻の奥深くに幽閉することとなる。

## 7. 見ることの根源条件—神力的力Xへの予覚

117. 身体の維持にとって不可欠な食糧等の生態的諸条件（身体性）が，文明を維持する重要な生命線であることはいうまでもない。
118. けれども，ある意味それに劣らず，巨大な都市文明の存立と維持のための臍を握るもうひとつの重要な条件と担い手が，歴史上は支配者たちに名もなきまま支配されてきたもうひとつの"身体性"（大自然，生態性）である圧倒的多数なす集合的な民衆・大衆・群衆たちである。
119. 自身の身体的存立が激しく揺すぶられ不安におののく時，大衆の関心は，自身の強い身体性に駆りたてられて，目の前に大きく立ちはだかり聳え立っている知的コードや観念体系の構築した空中楼阁の数々をも一気に透過して，社会により隠蔽されてきたその向こうの根源的"切断"ラインへと直進していく。
120. だが，そのような一気の情動的暴走は，集団としてであれ個人としてであれ，レミングたちの走りと同様，仏革命，ソビエト革命，ナチスの熱狂，そして一見穏やかな「アラブの春」等に示されているように，最終的には悲惨な自滅に行きつくものである。
121. 社会システムの網の中の心の硬直した囚人か，身体性に身も心も委ねた情的暴走による自滅か。身体性の大衆やその一人としての個人が，身体性の情的暴走の罨には陥らずに，いかに社会システムによるコードの網の縛りを振りほどき，恐怖と自由の根源へと直進しうるのか？
122. 社会システム内の奥から根源的"切断"へと向かう直進は，集合的なその群衆・大衆という集塊として荒々しく遂行されることもあれば，そうした集合性とは切り離された個人の体験としてつましく，しかし充実してなされることもある。
123. 上に述べたように，リスボン大地震によって人類に惹起された「見ること」における

巨大規模での変質や革命は、1)大衆という集合的存在の覚醒と、2)既存の普遍的な秩序原理(遠近法)の瓦解との2要素をその前提条件として発生したものである。

124. 美の享受や自然への畏怖等々の「見ること」の近代的めざめは、しかし、後者の個人において十全になされて初めて具体化する。
125. けれども、そうした具体的な個々人における特殊個人的な反応や行為も、巨視的にみれば、集合的な群衆・大衆という集塊内の個人として、その集合的な身体性のうちに含みこまれ、蓮の花たちの水面下の根茎ネットワークのように、サブリミナル次元ではその流動する集合的記憶や情動と、ゆるやかにではあれ秘かに連環している、と考えられるものである。
126. カネッティが、群衆の特性のひとつとして指摘しているように、群衆という集合体は、感覚が瞬時に伝染する強い一体性を有しているからである。
127. とはいえ、群衆の集合的な波浪はあまりにも曖昧かつ巨大すぎ、本論の能力を大きく超える問題系である。「見ること」の近代的発生にはその集合的な覚醒が深く関与している事実を確認するにとどめ、ここでは、社会システムにおける個々人の根源的"切断"ラインへの直進に限定して考察を先に進めることとする。
128. さて、先の問い(121.)は、こうである。  
社会システムの網の中の心の硬直した囚人か、身体性に身も心も委ねた情的暴走による自滅か。人は、身体性の情的暴走の罠に陥らずに、いかにして社会システムによるコードの網の縛りを振りほどき、恐怖と自由の根源へと直進しうるのである？
129. 根源的"切断"へと遡及する逆向きの「異化」的"切断"と、隠喩的疑似性によってである。 cf. 本論冒頭「1. 切断」
130. 根拠の欠落すなわち人間的営為の中空性のゆえに、全体像[B]は全き不可知・不可測であり、システム内に庇護されている「㊦見る人」に見えているのは、「可知的・可視的空間」ではと思いこんだ、"切断"ラインのこちら側の領域に仮そめに仮構された有限事象である。
131. 社会内の個々のモノ・コトは、その存在根拠を人間的サバイバル願望に照らし合わせて捻出され認知されたにすぎず、存在する諸事象・諸事物、そして何よりも人が行う行為という諸断片[A]には、そうすべき根拠も意味もそもそも賦与されてはいない。
132. それらは、社会的人間的意味をはずされれば、無惨きわまりなく積み上がっていたあの光景、コト・モノの意味なき断片の瓦礫の山に異ならない。
133. この断片[A]の現前と、全体像[B]の不在という悲惨こそが、人の「見ること」の基本にして動機であり、根源的な前提条件である。
134. 神的力X(全体像[B])は、"切断"線の彼方にあるのではと想定された謎の超越的力Xであり、"切断"線のこちら側には決定的に"不在"するものである。
135. 社会システム内の人(「㊦見る人」)に対して可視的に展示・呈示され体験されるの

は、断片[A] (モノ・コト) のみであり、全体性や全体像[B] は、切断線の彼方の不可視、不可知の神的力Xゆえにこちらには"不在"する。

136. 断片[A]は、社会システムが創り護る日常的な文脈の中にあり、社会システムを構成するいかに重要な部分としてのモノ・コトであったとしても、日常という自明化した文脈の中では、それを超えて特に眼をひく心躍らせるものでは基本的にありえず、またありにくい。
137. ルーティン化してしまい格別こちらの視界には入らない断片[A]とは、社会システム内でいかに有意義な細部として機能しているかにみえても、特別の輝きはすでに揮発し、冗長的なモノ・コトとして視界から後退したもの、いわば死喩化したものである。
138. ところが、人工的仮構物である日常性という人間的文脈からもう一度、但し今度は、ベクトルを生命と身体性の本源（大自然）との界面となる**根源的"切断"に向けて逆向きに遡行する新規の「異化」的逆"切断"**を、例えば展示場や観光地において行うや、社会システムにより産出されていた日常という人間的文脈から、断片[A]が一時的に切り離される。
139. 日常を一度遮断するその「異化」行為によって、"切断"が本来有していたはずの根源的大分節（大自然／文明，死・破壊／生・秩序構築）のスリリングな感触が、"切断"を行う者（「㊦見る人」）のうちに身体的に蘇りはじめる。
140. その時、根源的"分断"線の彼方に想定されるカオスや神的力Xの奏でるエキゾチックな響きや気配を、仮そめにであれ瞬時であれ、はたまたはなはだ微弱にではあれ、断片[A]が帯びえた時、根源的"切断"線の彼方の神的力Xの気配が、根源的"切断"の亀裂を越境して、こちら側へと激しく吹きつけてくることになる。
141. 断片[A]が、システムのつくりだす日常から「異化的に」"切断"されて、システム内に囚われている「㊦見る人」に向けて「㊧見られるモノ・コト」として呈示（展示）される時、根源的"切断"へと波を蹴立てて直進していくその強い遡及性は、断片[A]（「㊧見られるモノ・コト」）の彼方に想定される全体性・全体像[B]を、「㊦見る人（体験する人・観光する人）」に直感的に予覚させるのである。
142. その予覚メカニズムは、いうまでもなく、ホモサピエンスが生きるために獲得した、隠喩による擬態というあの太古来のサバイバル方略（「絶対的隠喩」）に由来するものである。
143. 異界のエキゾチックな響きを帯びる"切断"現象が、「㊦見る人・体験する人」の心の中に、人には不可知であったはずの神的力Xを疑似的に予覚させ、想定外の"サプライズ"を発生させる。
144. 大自然の神的力Xの 아우라 Aura（オーラ、全体性[B]の輝き）を疑似的にまとったモノ・コトを、「㊦見る人」の心のうちに疑似予覚的に「見る・体験すること」を、瞬時ではあるが可能ならしめるのである。

145. **神的力Xの疑似的予覚** (神的力Xを X'として、しかし Xであるかのように思いこんで疑似的に体験する行為) として、**"切断"線の彼方に想定される全体性 [B] のアウラ Aura** が、断片としてのモノ・コト [A] に憑依しえた時、展示的・観光的に「**見ること**」が**ダイナミックな事件 ("サプライズ")**と化す。
146. 「見ること、見せること (=展示・観光)」とは、したがって、"切断"線のこちら側 (内) にたたずむ人 (「㊦見る人」) に、"切断"線の彼方 (外) に予測されたある神的力Xを、"切断"線を疑似的に越境して、こちら側における神的力Xの"不在"が疑似的に放射してよこすアウラというかたちをとって、**予覚的に感受せしめ**、そのエキゾチックな予覚に感動すること、感動させることをいう。
147. 「見ること」(展示や観光)は古代より多々あるが、王侯や貴族たちの特権的体験としてなされたそれは、所詮微々たるレベルであって、「見ること」すなわち**「見ること」の集合的レベルにおける真正の開始は**、リスボン大地震への恐怖に揺さぶられて**大衆が集塊として**自然その他への旅に**集合的に参画**しはじめた18世紀末や19世紀前半からである。
148. a)太古の「**絶対的隠喩**」による大自然の中での**サバイバル方式**と、b)リスボン大地震という大都市文明への恣意的な破壊の一撃(本震)に**震撼した人々の深い恐怖とが、集合的な大衆のうちで身体的にドッキングしえた時**、奈落の底を照らし出す衝撃の通景 Vista の中、大自然(「盲目の意志」)の**巨大身体性**に人間の**小型身体性**が集合性の次元で深く共振して、ここに**"群衆"**という新しい怪物(超小型の「盲目の意志」)が誕生する。
149. 集合的な「見ること」への、大衆による類例のない集合的欲動(余震)が、「世界は舞台だ」としたバロックや、世界の珍奇を好奇心によって蒐集した「**驚異の部屋**」Wunderkammer とはまったく異なる展示や観光、挿絵といった**近代的な「見ること」**をついに歴史の表舞台に登場させたのである。
- cf. 高橋吉文「19世紀西洋視覚とジャポニスム — 挿絵の世界は切られてなんぼ —」, 大野寿子編『カラー図説 グリムへの扉』勉誠出版, 2015 所収
150. 問い：だが、根源的"切断"線への身体的直進の後もたらされる神的力Xへの予覚において、人は、大衆は、なぜ興奮し深い充実をおぼえるのだろうか？
151. 答え：それは、人が大自然(と死や性の根源)との危険な界面に立ち、自分を庇護してくれると同時に狭苦しく閉じこめてもいる人間的**社会システム**(こちら側)から**離脱し越境しうる牢獄の扉**("切断"ラインという限界線)を**開ける鍵**を今、**疑似的にではあるが回しつつあるからである**。
152. その時、臨死体験しながらに、彼方の無限で自由な光景(全的破壊という平準性すなわち死の状態)から、より自由な自分の可能性とより豊かな生命の息吹きとが新たに立ちあがってくる**ダイナミズム**を感受する。
153. 大衆は、大自然と濃厚につながっているその身体性によって大自然の全体性 [B] を感

じとった結果、生態系の限りない広がりの中に解放され、みずからの生命の多様性と限りなさを鮮烈に感じとるのである。

154. "切断"線の彼方の神力的力X (全体性 **B**) —それは、ショーペンハウアーやニーチェのいう不可視のディオニュソス的なものでもある—と疑似的にであれ繋がったディオニュソス的 (バッカス的) 没我的興奮が、既成の社会システム (アポロ的秩序構築) 内の貧相な断片 **A** にもまた、神力的力Xの"不在"を告げるアウラの感受を一時恵与する。
155. 身体性という大自然の一部でもある共通項、大衆の最大の弱点にして最強の武器でもある集合的身体の身体性が媒介項となって、"切断"線の彼方の大自然や神力的力Xという全体性 **B** を、疑似的にという限定つきではあれ、予覚として鮮烈に「見ること」を人に可能ならしめる。
156. かくして、"切断"の彼方の超越的な大自然すなわち**神力的力Xへの予覚**、**"不在"のアウラの予覚的感受**、そしてその結果発生してくる**"サプライズ"体験が、「見ること、見せること」の不動の根拠と根源的条件となる**。
157. 博物学者荒俣宏は、『想像力の地球旅行：荒俣宏の博物学入門』において、博物学による世界観光を「光を凝視するもの」と呼んだが (角川文庫, 2008, p.160), 展示や観光における「見ること」そのものが、そもそも 彼方の神力的力Xを 集合的身体によって 美的に (つまり疑似的に、隠喩的に) 予覚的に 「見ること」, すなわち **神力的力Xへの予覚** に他ならないのである。

## 8. 疑似性の秘法

158. だが、根源的"切断"とその彼方のカオス (大自然) への身体的直進は、そのタナトス的、ディオニュソス的魔力ゆえに、「④見る人」を破滅させる危険性を伴っていた。
159. その危険な直進と没入において最も重要な働きをするのが、すでに「3. 絶対的隠喩」と「7. 見ることの根源条件—神力的力Xへの予覚」で言及してきた隠喩の疑似性である。
160. 隠喩の疑似性を具体化するには、古代ギリシア悲劇のコロス (合唱団) に対応する展示における封印装置の設計が必要となる。
161. 例えば、旭山動物園では北極海に住む獠猛な北極熊がいかにも襲いかかってくるかのように、彼方の北極海という大自然の海における危険なリアルを、観客たちに恐怖とともに体験させる設計で人気を呼んだ。あつてはならない実際の襲撃は装置によって防御され、観客は、彼方の大自然の恐怖実態を「かのような」隠喩性と、北極海での弱肉強食の実相からは"切断"された動物園という新しい人工的な文脈とによって、心地よく安全に予覚することになる。
162. 「見ること」についての原理的考察を試行した本考察では、しかし、その抽象的考察

にふさわしく抽象的にとどめるものの、その救済的機能については最後に少しだけ補足しておきたいと思う。

163. 展示や観光における"切断"時、人間的な意味コードの剥奪（異化）は、なるほど、人間の社会システムの要素を洗い流す（無化する）ことによって、みずからも根源的な"切断"線の彼方の非-人間的なモノ・コトとなり、彼方の大自然の平準性に接続され、大自然の生命力と一体化するかに見える。
164. しかしながら、神的力量Xへの予覚とは、人間的な主体の消失により不可知な自然（神的力量X）と疑似的次元でなされたディオニュソス的な合一にすぎない。
165. 神的力量Xが、"切断"線の彼方からこちら側にたたずむ断片[A]に向かって確かに神気を吹きつけ、疑似的にはあるが、流入してくるかのように見える。
166. だが、神的力量Xの真正の流入は、【大自然／文明】を発動させる"切断"線そのものが消失しえた時にのみ、真の恐怖とともに生じうる破局の到来である。
167. 断片としてのモノ・コト[A]への神的力量Xの憑依をまのあたりにしたとしても、それを見ている者が社会システム内の「㊦見る人」である限り、神的力量Xのこちら側への流入は、リアルな現象としてあるのではなく、神的力量Xが流入してきたかのような(as if) 予覚としてのみ、依然疑似的に受信されているにすぎない。
168. もちろん、その予覚それだけでも十分に魅惑に満ちた特別の"サプライズ"ではあり、加えて、実はその疑似性のゆえにこそ、「㊦見る人」は、自己を破滅させうるに十分な彼方へのタナトス（死に向かう欲動）的誘惑の罟からもしかと護られる。
169. 疑似性の内包するいささかのデジタル性（バーチャル性）が、その"サプライズ"を体験する「㊦見る人」に神的力量Xの現前にも似た鮮烈な体験を保証しつつも、それと同時にその体験の帯びる破局性から精神と身体を優しく庇護してくれる。
170. 要するに、危険きわまりない彼方の本源（神的力量X）から、自己のサバイバルのためにのみ自己を切り離してきた人間の、瞞着ゆえの社会システムの仮構性と中空性の必然性をまずは見すえ、その上で瞞着の必然性もまた是認しつつ、疑似的なタナトス式予覚によって母なる大地（カオス）へと回帰したかのような大いなる喜びに、安心して、文字どおり疑似的にひたるのである。
171. 神的力量Xへのこうした疑似的予覚や、神的力量Xの"不在"が放射するその力のアウラのそうした疑似的受信を通じて、人や断片[A]は神的力量Xや、"不在"する全体性[B]へと逆説的につながっていく。
172. その疑似的予覚と受信によって、「㊦見る人」は、社会システムでは潜勢していた彼方の大自然（現実）と瞬時だが接続され、人と大自然とをつなぐ身体性の回路の奇蹟に心打たれるのである。
173. この神的力量Xへの予覚こそが、その発現の濃度に種々差はあれ、社会システム内の展示や観光において「㊦見る人・見せられる人・体験する人」に、神性の疑似的現前という非日常的な"サプライズ"（驚異・奇蹟）体験を勧請する。

174. 現代サブカルチャーにおいて「聖地巡礼」なる現象が広がりを見せている事実も、江戸後期、神社仏閣への詣でや開帳等が大衆にとっての観光への根拠と開眼をもたらしたのと同様、大衆のうちに内蔵されている神的力Xへの予覚という「見ること」を成立させる基本的回路と"不在"する Aura への渴望が、今もなおたくましく脈動していることを私たちにつげるものである。
175. より正確には、「危険社会（破局の時代）」に明確に突入した現代においてこそ、今こそ、人類の存続といった抽象的テーマには意識の表層では鈍くて無関心、しかしながらその無意識レベルでは異常に敏感な、若者や大衆の内なる身体センサーが、救いを求めて激しく SOS を発しているのである。
176. さて、展示的に「見ること」とはどのようなメカニズムによっているのか、その考察の結果を最後に簡潔にまとめてみたい。
- 1) 根源的な"切断"【彼方の異世界（カオス・大自然）／此方の人間的な社会システム】の大分節によって人間は、自己と社会をややバーチャルなものへと改変し、それにより自身を護る。
177. 1)' だが、その改変と防御の結果として、その社会システムの増殖と拡大、その中への自己幽閉は、生態的自己の身体生命源である大自然からの乖離と枯渇を招来する。
178. 2) それゆえ、システム内幽閉からもう一度自己を解き放つべく、展示や観光の「見ること」によって、その大分節に向けて遡及する「異化」的"切断"を遂行する。「見ること」の蘇生的試行と断行である。
179. 2)' その断行において、自分を包摂する宇宙へのはるかなる見晴らしと、宇宙とつながったみずからの身体神秘性への喜悦とが、みずみずしくそして安全なくつろぎの中喚起されるのである。
180. 神的力Xへの予覚という恍惚の中で、神的力Xの疑似的ミニチュアとして、アポロ（秩序）とディオニュソス（カオス）とを繋ぐ「アポロ・ディオニュソス渾融」（高橋）としての歓喜 Freude（＝世界讃美のライブ的熱狂）が発生する。
- cf. 高橋吉文「ニーチェのアポロ・ディオニュソスからくり（二）」、『言語文化部紀要』第7号、北海道大学言語文化部、1985所収
181. "切断"により分節された彼方から超越的な力（神的力X）が不意に来襲して、その神的力Xが開示する彼方の気配、ないしは彼方の予感（予覚）が、"切断"のこちら側に築かれていた社会システムの内部にいる「④見る人・体験する人」のうちに、何ものにも代えがたい"サプライズ"（美的感性のみがなしうる解放と愉悦）を劇的に流入させるのである。

\* \* \*                      \* \* \*                      \* \* \*

182. 「見ること」—それは、新たな"切断"と、神的力Xへの新たな予覚の謂である。